

研究結果報告書

多言語・多文化共生社会の視点から見た日中言語行動の共通及び衝突点
－ 依頼、誘い、断り表現を中心として－

所属： 瀋陽航空航天大学 外国語学院 日本語学科
役職： 副教授
氏名： 文 鐘蓮

時代の変化は更に多言語・多文化社会の共生への必要性を強く必要としており、避けては通れない課題となっている。相手国の言語・文化をより良く理解することは、今まで感知していない自国の言語文化の特徴を認識すると共に他国の人とも友好に接触する可能性を高められると考えられる。

本研究ではロールプレイ (role-play) の研究法を採用し、日本と中国側で各 40 人 (20 ペア) の大学生を対象として調査を行った。分析は Beebe et al. が提出した意味公式 (Semantic Formulas) をを用い、以下のような研究成果が見られた。

相手人物や場面に対する認知度において、中国人は「断り」や「誘い」のような言語行動を行う際に、相手の社会的地位、力関係、親疎関係に敏感に反応し、その言語表現の形式も大きく変化し、あらゆる言語表現を尽くして相手との「関係修復作業」を行おうとする。しかし、日本人の言語表現は殆ど「定型表現」になっており、相手人物の社会的地位、力関係・親疎関係によって敬語の「です、ます」と「タメ口」型の区別の他に、言語表現における選択の差異はあまり見られなかった。

言語の属性から見ると中国語は孤立語に属されており、現代中国語には個別の人称代名詞や呼称などといった特別な表現の他に殆ど敬語はない。ゆえに、社会的地位の高い人や心理的距離の近い親友に対して、話し手は様々な積極的な気持ちを表す意味公式の多用化を見せなければ相手に対する申し訳ない気持ちを十分に表現したとは思えないので、多様な言語表現の選択が見られたと考えられる。

以上のような言語表現の特徴から中国における言語生活はまだ権力、社会的地位、親疎関係に大きく左右されており、日本では敬語の選択を除き、中国人ほど大きい変化は見られなかった。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

1. 「多文化・多言語共生の視点から見た中日断り言語表現の特徴」, 文 鐘蓮, 『融合・共生・インタラクション中日韓言語文化国際シンポジウム』, 2012年9月, 東北大学.
2. 「日本語学習者に見られる「誘い」の言語表現の問題点」, 文 鐘蓮, 『第五回中日韓日本言語文化研究国際シンポジウム』, 2013年9月, 大連大学.

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

論文1. 「多文化・多言語共生の視点から見た中日断り言語表現の特徴」, 文 鐘蓮, 『中日文化比較研究論集第三輯』, 2013年11月.

論文2. 「日本語学習者に見られる「誘い」の言語表現の問題点」, 文 鐘蓮, 『日本言語文化研究第五輯』, 2014年12月.

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)